

Title	佐藤先生の弟子
Sub Title	
Author	遠藤, 周作(Endo, Shusaku)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.347- 350
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0347

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

心にきめた。しかし私はそれとはおよそちがう方向に歩き過ぎてしまった。

だが、幼い日にみとれた〈教授〉の姿は、いまでも私の心につよく残っていて、今、私は佐藤先生にそのイメージを重ね合せているのである。

私は数年前のある夏の夕暮に、偶然三田山上で丁度私の幼い日にみとれた通りの光景を見た。その〈教授〉が佐藤先生であった。若い学生がワイシャツ姿であるところだけ

が私のイメージとちがっていた。

私たちはいま平和とよばれる時代に生きている。

戦争に負けると分ってからの二年間……などともう先生はおっしゃるまい。しかし、もしかして〈戦争〉ではなく、別なことはがそこに当てはまるような世の中が来ないとはかぎらないようにも思われる。そんなときは、また、今度は私の子供を連れて、先生にお話を私も伺い、子供にも伺わせたいと思う。

佐藤先生の弟子

遠藤周作

私は日吉の頃、独逸語のクラスであったが仏文科を三田で選んだのは、佐藤先生の「仏蘭西文学の潮流」という本を読んだためだった。

今でもはっきり憶えているが、ブルーの表紙カバーのか

かったその本を私は偶然、下北沢の古本屋でみつけたのである。

この本で私はフランス二十世紀カトリック文学の存在を知った。マリタンが監修したロゾ・ドールや島々叢書のよ

うな存在を知った。ちょうどその時、私は吉満義彦先生が舎監をされている学生寮に下宿していたからマリタンの名は聞かされていたしその翻訳も幾つかは読んでいた。だが自分ではまだ独文をやるうか哲学をやるうか迷っていたのである。その時「仏蘭西文学の潮流」一冊が私に先生の講義をきくために仏文科に進む決心を即座に起させたのである。私は早速仏蘭西語の独習をはじめた。

あれから二十年、今でも私の書架にはこの本がある。開くとその中に沢山の書きこみがある。先生の御署名もあるが、もちろんこれは仏文科に進学してから先生におねだりして書いて頂いたものだ。

こうして、三田に進学してみると意外なことに佐藤先生の講義はない。井汲先生と後藤先生の講義だけでこれには私も閉口しがっかりしたものだ。

吉田という西洋史の学生が私を佐藤先生の家につれていくてくれたのは大学の一年も半ば終った時だった。私が先生に自分は廿世紀のカトリック文学をやりたいのですと申

し上げると先生はマリタンの「芸術とスコラ哲学」を読めと言われて御自分の書棚からその本を貸して下さった。独学の仏蘭西語には余りにむつかしいこの本を、しかしその夜から辞引を引きつつ一頁一頁、溜息つきながら読んだのをまだ憶えている。

三年生の時、やっと先生の「ジイド」の講義が開講になった。あの講義時間ほど三田の在学中、充実した時間を感じない。私はその頃自分でもよく勉強したと思う。

先生がある日、私をつれてN・H・Kにいかれたのも憶えている。そのN・H・Kの廊下で先生は長身の青年と立ち話をされていたが、その帰り

「あれが白井君だ。来年から慶応に来るのだが、君たちは彼からサルトルを読んでもらったらどうだ」

とおっしゃった。

永戸氏や佐分氏は私の一級上の上級生だったがこの人たちと私とは、サルトルの「自由への道」をガリ版ですって、白井先生をお迎えした。大学の講義が終ったあと、空

いた教室をやっと見つけて、白井先生からサルトルの話を伺ったのも懐しい。

在学中、私は先生のお宅に吉田とたびたびお邪魔をし、時には泊めて頂いたことさえあった。私はその頃、怪しげな小説や評論を書き、さかんに先生のところを持ちこんだが、先生は御忙しいなかに原稿に評まで書いて戻して下さるのであった。今、思えば顔から冷汗のするような原稿ばかりだが、あんなものまで眼を通して下さった先生の御恩は忘れがたい。小説や評論だけではなく川柳や漫画まで書いて先生のところを持ちこむと、流石に苦笑されて

「漫画だけはうまい」

とおっしゃったものだ。

私の卒論は「ネオ・トミズムの詩論」でこれは原書を買えない時代だったから、先生から拝借したもののばかりで書いたのである。

先生のお世話で鎌倉文庫にしばらく働き、それから仏蘭西留学をして病気になる帰国してみると、ある日、渋谷の

余り奇麗でないバアで一人の若い学生がくっつかかっていた。彼は私をドブに突き落したが、これが後年の若林真氏である。私は泥だらけになり、そのためタクシーの運転手も臭いと言って乗せてくれなかったぐらいである。

卒業後も先生は、いつも私のことを気にかけて下さった。もう昔のように先生のお宅を伺って深夜までお話を伺うような向う見ずのことはできなくなったのが残念だ。しかし先生は必ず私の書いたものを読んで下さる。そして、時にはお叱りやお手紙を下さる。

先日、ある会のあと久しぶりに先生のお供をして銀座に出た。先生は何げない調子で

「サルトルは色々なチャンネルを一つだけ残して全部切ってしまったている」

とおっしゃった。つまりそれはサルトルにふれながら、私に御注意を与えて下さったのである。

「遠藤は小器用だから心配だ」

と先生は前からおっしゃっていた。

「遠藤もチャンネルをできるだけ切ることだ。」

その夜も、そういうお叱りをうけたが私は嬉しかった。

久しぶりに学生時代、先生のお話を喫茶店でサッカリンの紅茶やコブ茶などを飲みながら、うかがっていた時と同じように嬉しかった。慶応の仏文科にはもう縁のない私だが、先生や白井先生や若林君や高島君がいる限り、あそこは何か私の故郷のような気がする。